

サンクト・ペテルブルグの夜

井上 まどか

モスクワから約6時間。夜行列車がサンクト・ペテルブルグに到着する。このモスクワ駅は、街の中心を貫くネフスキー大通りに面している。冬の訪れの近い日の未明にここを歩けば、「このネフスキー大通りを信じてはいけない。…すべてがまやかしであり、すべてがまぼろしであり、すべて、見かけとはちがっているのだ！」というある作家の言葉が、時を超えて生きていることがわかるだろう。ヒトラーと縁のあるというホテルの建物の陰から、イサク寺院の前、ニコライ一世の像の建つ広場にでると、夜露にぬれた石畳がまばらな街灯のあかりを反射して、広場ぜんたいが橙色にけぶって浮かびあがってくる。ここから数分歩くと、革命をおこしてニコライ一世に処刑された貴族達の名前を冠した通りにある自分のアパートにたどり着く。

大学寮の相次ぐ部屋料値上げと、寮生全員へ早期退寮を促す張り紙の突然の掲示に半ばあきれて、マリンスキー劇場近くのアパートに引っ越したのは、建都三百年を祝う2003年の夏のことだった。

寮をとるか、アパートをとるか。寮には煩わしさと紙一重のおもしろさがある。「この世には哲学にふさわしい言葉が三つある、それはギリシャ語、ドイツ語、そして…ロシア語だ」と真面目な顔で語る寮の警備員でヘーゲルを専攻するロシア人の哲学部院生との会話。明け方になってフライパンで豪華な音をたてて料理をつくりはじめる隣り部屋の中国人学生。部屋で食料品販売をはじめた中国人学生のしたたかさ。難解な文章にとりかかっているときに限って、ひとの弟分を勝手に名乗ってベチェリンカ（パーティーというより飲み会）に誘いにくる韓国人学生（女子学生はそこまで厚かましくない）。これぞ寮生活。また、身の安全の確保という視点もあるだろうが、少し前に殺人や強盗事件のあったこの寮のことだから、安

全面ではアパートと大差なかった。

ソ連時代の遺産か、モスクワもペテルブルグでも、皮膚の色の違いや骨格の違いで、日常の視線に痛めつけられることはすくない。日本人作家がリヨンで体験した東洋人であるがゆえの劣等感は、ここでは鮮烈には感じられない。たとえば、服装や身のこなしで見破られることを覚悟のうえで、ロシア人友人の助言のようにヤクーチヤから来たと言って大きな顔をして過ごすこともできるだろう。韓国系ロシア人だと言い張ることもできる。そもそもそんな言い訳をせずとも、アジア系の顔立ちだということで疎外感を感じることはあまりない。ただ、それはこのペテルブルグの人間社会が階層の微妙な差異に敏感ではない、ということの意味しない。また差別が存在しないというわけでもない。さらにロシア系住民の大ロシア主義的発想が根絶したということでもない。コーカサス山脈以南（ザカフカス）の人々は、その皮膚の色、帽子や服装、言葉のアクセントなどの特徴をアネクドート（小話）にとりあげられ、地下鉄では鉄道警察によびとめられる。ロシア人はよく「僕らにはアジア系は見分けがつかないね」と言う。けれど、服装や行動様式で中国人を見分け、中国人の流入増加の脅威を眩き、ときには侮蔑の視線を送りもする。ナチス時代の骨相学の亡霊かと思えるようなやり方で、ユダヤ人を外見で見分けようとする。市電に大勢で乗り込んでくるロマに対してだけは、車掌も声を荒げる。それらはロシア系社会のなかでの差異・超富裕層のロシア成金への反感や外資系の企業・宗教団体を通して富を増やし、海外脱出の機会を待つ知人への妬みと羨望といったアンビヴァレンツな感情と同様に、存在する。

ソ連邦崩壊後の経済的混乱と貧窮、ロシアに対する対外的イメージの急落に対する劣等感と怒り、ソ連時代の特権階級の温存とその顕在化、社会保障の欠如による日常生活の困難さが一体と

なって、ここペテルブルグでも殺伐とした状況を生んでいる。ロシア系の人々のなかで大ロシア主義的発想や国家防衛の意識が呼び覚まされる。ザカフカス系少女の殺害やユダヤ人差別のポスター掲示といった外国人排斥の動きがある。国のほうでは、違法滞在中国人の一斉検挙などを行っている。ここでの生活は、疎外感は少ないとはいえず、妬み、嫉みや侮蔑といった視線が幾重にも交錯するなかでの疲労感と無縁ではない。

ロシアに来る前、修士論文を書き終えた後は、ロシア近代史における宗教思想の生成を歴史社会的にときほぐしていこうと目論んでいた。資料の範囲や収集で焦慮しつつ、ともかく、一方では宗教思想家とされる人々のテキストの読解からはじめ、他方では研究所で現代の宗教事情をレポートする仕事を進めていると、自分のなかで対極する立場からの突き上げにあった。恥ずかしながら臆せずいえば、宗教とはなにか、という問いを巡る相克、葛藤に集約されるだろうけれど、ほかに考えるところもあって、短期というより長期で行かねばなるまい、と急ぎ、とある奨学生の資格を得て、サンクト・ペテルブルグに来了。

大学の博士課程に在籍することになったものの、奨学金制度の関係で、公式的には1年間ロシア語の授業、その後3年間の課程という都合4年間の滞在許可が出た。博士論文を提出するのは、ロシア語と哲学、専門の試験を受けた後という、いわゆる候補生の制度を取り入れている。私は1年の留学を希望していたので、博士課程への入学・4年の滞在許可は晴天の霹靂だった。気をいれかえて入学してみると、必修はロシア語と哲学の授業で、候補生になる審査のために提出する書類によると、そのほか、指導教官の授業・ゼミの参加記録の報告が義務づけられているものの、実質的には、論文を書き、それを学術誌や学会で発表することのほうが重視されるようである。博士課程用の授業・ゼミはないので、修士学生用の授業をうけることになるのだった。

必須になっているロシア語と哲学の試験はなるべく早く受けたくて何度か申し入れに行くけれど、なんだかんだと理由をつけて受けさせてくれない。モスクワの人文大に留学している知人とは大きな違いだとうらめしく思いつつも、授業のほかは図書館での資料収集と、ペテルブルグの宗教団体の下調べを当分続けることにした。

こちらで籍を置いている、宗教哲学宗教学科は哲学部にある。ソ連邦時代は、無神論学科であった研究室である。ソ連邦崩壊後、国立大学で宗教研究がいかに移行・展開したかという点については、稿をあらためて検討したい。今現在のペテルブルグ国立大学の宗教学科では、宗教理論、神話研究、キリスト教研究、ロシア正教研究が主要科目となっている。そのほかにインド宗教研究などがある。アジア研究については、中国学を専攻する別の学科の教授が教えにきており、日本宗教研究はほとんどなされていない（一人だけ独学に近い人たちで、アイヌ研究を行っている博士課程学生がいる）。指導教官はロシア正教史を専門としている。宗教理論を担当していたのは、市内の欧米資本系の大学で人類学を専攻した講師だった。彼は、エリアーデの話をだすと、顔をしかめた。エリアーデの本は多く翻訳されているけれど、エリアーデの著作を宗教研究として高く評価し、目を輝かせて語るのには、宗教学科の学生ではなく、むしろ他学科の学生であったのが印象的だ。理論研究で残念に思ったのは、ソ連期の宗教研究が全く顧みられていないことだった。佐木秋夫先生もお嘆きか。いずれにせよ、ソ連期、或いは共産主義と宗教を巡る検討は、手法は互いに異なるにせよ、ロシア連邦外のほうが進んでいるだろう。

研究フィールドを現代の都市部に移行すると、留学前に決めていたけれど、文献・資料収集と同時に、ペテルブルグの宗教地図を、概括的でもよいから作成したかった。ペテルブルグ市内の宗教団体は、キリスト教系は網羅され住所など基礎的事項も含めて資料として公開されているが、非キリスト教や新宗教系については、基礎資料が入手できない。そのため、一覧表をつくるためでさえ、情報を収集して、足を運ばなくてはならなかった（イスラム、ユダヤ、仏教や新宗教系については、教義や歴史などを概括する本が幾つか出版されているが、それはペテルブルグに限ったものではないことが多く、また基礎的資料に欠けていた）。この学科では、実質的な調査演習は行われていないし、エリアーデの洞察より、罪深さのほうを語る上述の講師は、自身は実地調査を行うけれど、共同で何かをする時間はないようだった。

ペテルブルグの本屋については、ペレストロイカ直後の教訓「見たらすぐ買え（次に来たときにはもうない）」が未だに生きていると思うが、新刊

本屋、古本屋、書籍市場や屋台をまわりつつ、街中のフリーペーパーを集め、配られるチラシは断らず、道で声をかけている人にはとりあえずひっかかって話を聞くという作業のなかで集めた情報をもとに、宗教団体を訪ねるといのが、ウィークデーの夕方と週末のルーティーンとなった。それをして何になる、素人のお遊びですか、という心の中の声が気になったが、フィールドを移したばかりの自分にとっては、そうした一からの作業が大切だと思ったし、礼拝に集まる人々の話、声が聞きたかった。…図書館は図書館で、朝早くから熱心に通い、本をうず高く積み上げて読み耽る高齢の方も多いロシア人研究者に混じって、カードを調べたり、資料請求したり、机に向かっていると、時間がいくらあっても足りなかった。受け入れ資料の減少や欧米の学術誌が皆無に近い状態に、時には非常に腹も立てたが（そのお陰で、論文をネットでカード決済で買う羽目に陥ったこともあった）、文献リストを書き換えつつ、その資料の収集を第一目標にして、図書館に居座る時間を決めた。そうでなければ、今もまだ鬱蒼とした書籍の森のなかに迷い込んだまま、アジア系ロシア人になったつもりでそこにいたに違いない。

新宗教系の場合とはくに、警戒されたり準備・用意されたりするのも困るので、一人で、またなるべく事前連絡なしで出かけた。そのために、やっているはずの集会がなくてすっぽかさされたり、別のアパートに移った後だったり、住所が見つからず途方に暮れたり、廃墟のような中庭で、訪ねていくべきかどうかしばし考えあぐねるということもあった。

1997年の宗教法により、資格を十分に満たす正規の宗教団体以外は、団体所有の建物が持たなくなったので、新しく伝道しに来た団体だけでなく、従来の新宗教系団体も個人所有のアパートか、時間決めて貸し出すホールなどで礼拝を行うようになった。そのせいで、外観からは何がどこにあるのかさっぱりわからない。しかし、外壁ははげおち、殺風景な中庭を通して、暗く、独特の匂いの立ちこめる階段をあがっていき、ひとたび部屋の中に招き入れられると、入り口にはコートや靴が数多く並び、さらに奥へ進むと、きちんとしつらえられた聖壇のまえで前に立つ人の話を熱心に聴く人々や、スライドに見入る人々、果てしもなく議論を続ける数名のグループの輪があったりする

のだった。室内は暖かく、人いきれでむせかえるようなこともあった。

ベテルブルグはスリの天国とも言われるから、考え事をしながら歩くのは、あまりよくないのだけれど、留學生活の昨今について考える。メールとウェブの使用が当然の現在では、日本の生活との間にタイムラグがある、とか、留學している間はほとんど連絡を絶って、何かに打ち込むということは少なくなってきた。日本での仕事の話を進めたいと思えば、メールで即時の連絡がとりあえるし、ロシア国内だけではなく、比較的近隣の国の研究者の動向がウェブ上でわかり、学会や何かの機会に会う約束をとりつけることも迅速になった。そのことにマイナス面もあるだろうけれど、そのプラス面を生かした留學生活のスタイルが根づいていくのではないだろうか。

引越しを契機に、文献読解に力をいれ、サドン・アタック方式の下調べを減らしていくことにした。目処がついたのは、外来系の新宗教のみだったが、一人での下調べには限界があり、チームワークを組む必要があった。それに、「なぜ」という問いが積み重なっていくなか、時折、ひどい嫌悪感が襲ってきた。異質なものとのお会いを消化しきれていないようだった。

ベテルブルグに来たばかりの時に驚いたのは、バス停に立つ人々が今来るか、次来るかとバスの番号を必死に読み取ろうとして、みな車がやって来る方向を見て待っていることだった。白タクというより有料ヒッチハイクといったほうが適切だろう—であれば10分もかからない道のりを、一時間強と見積もらなくてはならないというのは、なかなか解せなかった。知っている道のりであれば白タクも楽しい。が、よく知らない場所まで乗せていってもらうのは、冒険だ。それで30分も40分も待つことがあって、寒さだけではなく、質の悪い燃料のせい、古い車のせい、排気ガスの多さにひどく気分が悪くなり、呼吸器系を患った。

留學中に御逝去されたA先生、赤いスカーフを贈ってくださり激励してくださったN先生、その他諸先生方の「無事と健康が第一ですよ」という暖かい言葉が身に沁みる。ほんとうにありがたいことだなあとしみじみ思う。

部屋で沸かす鍋の蒸気と熱でぼんやりした頭のまま、アンジェイ・ワイダの『地下水道』のラス

トシーンが思いおこされる。ようやくのことで、地下水道から地上に頭をだした主人公は、目に映る地上の状態をみて茫然となり、しばらく後、ゆるゆると地下水道に戻っていく。その後、彼は地下世界に何をみたのだろうか。

二重窓の閉められた室内で、建物の各室にパイプで通じている壁際のスチーム暖房にまもられベッドにくるまっていると、まやかしやまぼろしではない、これまで出会ってきた人々とそのときの様子が浮かんでくる。

見事に職業意識に徹し、誇りが感じられる科学アカデミー図書館、国立図書館の司書の人たち。少人数の授業の行われる大学の教室。大抵が半ば崩壊している中庭をもつ建物の、暗い階段をの

ぼって信仰者の集まるアパートの一室を訪ねるとき。冬でも暖房のきかぬ暗いバスや市電のなか。暗闇に近いところで裸の人々が白樺の枝でたたきつつ汗を流す公衆浴場。日本アニメのロシア人ファンが週末にそぞろに集まるモスクワ駅のホール。独特のインテリな雰囲気漂わす演劇用劇場。雪の降る街角で、亡くなった息子の生き返りについて語る中年女性。どこでも人は、静かだが、熱をこめて語る。言葉のさざ波と口から吐きだされる蒸気が、たちのぼる気のようにこちらへ流れてくる。その光景は、ペテルブルグの街の、暗闇に沈黙する歴史的建築群の下、地下世界の一角にともる数々の灯りのようだ。そこは悪魔の住むところなどではなく、黄泉がえりの場所なのだろう。